

# 映画・本・歴史のこと



《第11回》西本正と香港映画(2)

有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家。

写真は、香港ゴールデン・ハーヴェスト撮影所にて、1981年筆者撮影。

中国語では映画を電影という。ただ普通は戯(ひい)で、映画館は戲院(げいゐん)となる。香港で「邦画」に当たるのは、香港製、台湾製、中国製で、これらを國片と呼ぶ。使用言語によって、粵語(えうご)片(広東語)、國語片(北京語)に分かれる。國片には必ず北京語の字幕が付く。香港、台湾製なら、加えて英語の字幕も付く。日本映画もそうなるが、広東語吹き替え版もある。英米の映画なら北京語だけ、仏伊などは、最初から英語吹き替え版なので、北京語字幕だけになる。テレビも似たよう



香港の新聞の映画広告

なもので、台湾では原住民(公式語)語も加わり、画面が字幕だらけである。**新東宝発足**  
一九四六年に引揚げてきた西本正は、まず日映(日本映画社)に入る。日映は戦時統合でできた社団法人で、敗戦後、解散の後、(株)日映として再発足。社長は満映の根岸寛一で、右も左もごっちゃ混ぜの所帯であった。その頃、東宝は大ストライキ中で、組合の事務局長仲沢半次郎から、「東宝に来て」と誘われる。ストライキ

の中心は、共産党系の第一組合。配給、営業部門が第二組合を結成。つづいて、大河内傳次郎、長谷川一夫、原節子、高峰秀子ら十人のスターが「十人の旗の会」を立ちあげ、第三組合ができる。四百三十八人の従業員が第一組合を脱退し、その動きにつづいた。その声明を書いたのが、市川崑である。

## 香港へ

カラーとシネマスコープの技術を教えるカメラマンを貸してほしいと、シヨウ

ブラザーズ(勸氏兄弟有限公司)社長ランラン・シヨウ(邵逸夫)から、新東宝に要請があった。西本正は、一九五七年、初めて香港へ渡った。作品は『異国情鴛』(一九五八)で、香港と韓国との合作である。  
ちなみに、韓国は二十世紀末、金大中が大統領となり、ようやく日本映画が解禁となった。香港との交流は長く盛んであった。七十年代に韓国に行ったとき、どうしてこうも香港映画をやっているのかと不思議に思った。こちらの認識不足だったわけである。  
当時は李承晩(イクサンマン)の反日時代だったから、韓国との合作では、日本を隠さなければならなかった。若杉光夫は華克毅、西本正は、主演女

優(ユウミン)の尤敏(イムミン)と名付けてくれた。

尤敏は一九六二年から二年間で、『香港の夜』など東宝との合作四本に出演した。週刊新潮の表紙にもなり、「第二の李香蘭」と称されている。

その李香蘭(山口淑子)は一九五〇年代、香港でブームとなり、九本の作品に出演している。

ハリウッドで三本の映画に出た彼女は、夫イサム・ノグチともども、赤狩り旋

風の中で、FBIの尾行がついていた。アメリカ公文書館には、ぶ厚い「山口淑子ファイル」が現存している。

ノグチと離婚し、ヨーロッパ回りで香港に来た山口淑子は、『神秘美人』(一九五七)に出演、本人の希望でカメラは西本正が担当、監督は若杉光夫だった。

西本正は二本を撮影して半年後に帰国。この時期に新東宝で中川信夫と代表作『東海道四谷怪談』(一九五九)をはじめ八本でコンビ

## 再び香港へ

を組んでいる。シヨウ・ブラザーズがカラーの超大作『楊貴妃』を製作することになった。巨匠李翰祥監督は、西本正のカラー撮影のラッシュを見て感心して

しまう。

ここから西本正は賀蘭山(ハランサン)と名乗る。カラーや照明の技術で欠かせない人材となった。『楊貴妃』(一九六二)でカンヌの賞をとり、それは決定的なものになる。李監督とは四作品で組んだ。

もう一人、重要なのが胡金銓(キンファン)監督。日本や台湾にも熱狂的なファンがいて、研究書もある。『大醉狂』(一九六九)は、『座頭市』や『椿三十郎』のアイデアが盛り込まれ、ワイヤーやトランポリンがこの時から武俠映画で使われるようになった。以後、香港、台湾ではチャンバラ映画が量産される。キンファンは台湾で『龍門客棧』(一九六七)を撮った。

## 口活の監督を呼ぶ

東南アジアで上映するた

め、シヨウ・ブラザーズは、日活のアクション映画を二百本ほどまとめ買いをしてきた。つづいては、その監督たちに香港で撮ってもらう方針となった。六十年代後半から七十年代にかけてのことである。

まず井上梅次で、自作の松竹『踊りたい夜』や裕次郎の『嵐を呼ぶ男』のリメイクも含め、西本正は五本組んだ。

中平康がつづく。やすしだから楊樹希(ヤンジュキ)と名乗る。自作の『狂った果実』のリメイクなど四本。古川卓己(カキイ)の『太陽の季節』(カサキ)のリメイクなど二本。大映からは、ビルマ戦線生き残りの村山三男、三カ月で三本の早撮りをやってのけた。

『風の又三郎』や『有楽町で逢いましよう』の島耕二

も二本撮っている。島さんなので、中国名史馬山(シマサン)日香合作で松尾昭典の『亜州秘密警察』というのものもある。

## 『猛龍過江』

一九六九年、西本正は独立しCMを作る会社を始めた。一九七二年、ゴールデン・ハーヴェストのレイモン・ド・チヨウから連絡が入る。ブルース・リーが、西本正に撮影を頼みたいと言っているとのこと。それが、ローマにロケした『ドラゴンへの道』(猛龍過江一九七三)だった。

ブルース・リー(李小龍)はつづくアメリカとの合作『燃えよドラゴン』(一九七三)のあと急死した。しかし、彼のアクションは今でも世界中の映画に影響を与えている。



撮影中の西本正と尤敏(1936~1996)